



まちづくり提言書2014

一般社団法人 鳥栖青年会議所



鳥栖 JC 運動宣言 2009

われわれ鳥栖 JC は、
日本の価値観をしっかりと継承した
つよく、やさしい人びとによる
自立したあたたかい都市を築き、
九州の中核として
九州全体の発展に寄与できる
力強いクロスロード地域の創造をめざし
運動することを約束する。

基本理念

1. 自立の精神
2. 共生の思想

運動の柱

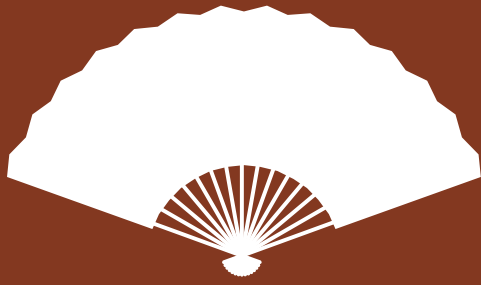
- ・人づくり
- ・地域コミュニティづくり
- ・都市づくり
- ・クロスロードづくり

Preface

戦後の日本は、首都圏を中心とした中央集権型社会によって高度成長期を過ごし、世界経済を牽引する先進国にまで発展してきました。しかし、バブルの崩壊とともに疲労化した国家制度が浮き彫りとなり、その後の度重なる経済危機、さらにはアメリカに端を発したリーマンショックにより、社会構造の変化が求められる時代となりました。都市部の一極集中による地域間格差や、人口減少及び高齢化社会といった問題がさらに大きな国家の課題となる現状において、今後はそれぞれの地方が、地域の様々な資源を最大限に発揮し、活力ある地域へと昇華させ、国家の繁栄に寄与する社会への転換が必要です。そのような社会構造の受け皿として、私たち一般社団法人鳥栖青年会議所は、永年に渡り議論が続けられている道州制の導入を基軸とする地域主権型社会への移行が必要であると考えています。

地域主権型社会の実現には、中央政府に依存しない一定の行政を実行できる規模と能力を必要とするとともに、その地域に住み暮らす地域住民がまちづくりへ積極的に参画する当事者意識が必要不可欠となります。やがて訪れる地域主権型社会を見据えて、私たちは、九州全体がさらなる発展を遂げるためには、佐賀県東部地域（鳥栖市、みやき町、基山町、上峰町）と久留米市、小郡市を含めたクロスロード地域が一体となり、国家の繁栄に向けて、九州の発展に寄与する中核都市とならなければならないと考えています。

今回掲げさせていただいた五つの提言は、九州という枠組によって育まれ成長してきたこのクロスロード地域の使命として、自らの地域の発展のみならず、九州全体の発展へと導く地域を実現するために、今後、地理的な優位性を最大限に発揮してそれぞれの分野において九州の「かなめ」としての機能を果たすこの地域の姿を提言させていただきます。九州におけるこのまちの未来の姿とともに、地域の発展は九州の発展と考えることのできる人々が住み暮らす地域となることで、九州全体に影響を及ぼすことのできる活力に満ちた力強い中核都市を目指していきましょう。



九州のかなめへ

五つの提言

01 「連鎖」のかなめ

Links



02 「情熱」のかなめ

Passion



03 「救済」のかなめ

Relief



04 「国際」のかなめ

International



05 「生命」のかなめ

Life



01 「連鎖」のかなめ



Links



連鎖のまち

この地域は、古くより九州における交通の要衝の地として、多くの人や物が行き交う地域であり、交通網の拡充とともに、物流を核とした拠点機能を果たす地域へと成長を遂げています。今後、この地域を、そして、九州を更なる発展へと導くためには、九州によって生まれ、成長を遂げ続けているこの地域の最大の魅力である地理的優位性を活かし、九州の各地域を結ぶ「かなめ」のまちとなる必要があります。高齢化社会の中で迎える地方の時代は、既存の行政単位のみでの自治は難しく、地域間の連携や新たな枠組みの構築が必要不可欠です。九州各地の人が集まりやすく、九州全体を俯瞰できるこの地域は、各地域の連携を促したり、それぞれが持つ魅力をつなげたりすることで、九州各地域の発展を導き、九州全体を活性化させる「まち」にならなければなりません。九州の各地域を結び、さらなる発展の「かなめ」となるためにも、交通の利便性を活かした九州の人々が集う役割を果たす機能を備えたまちづくりが必要です。

九州各地には、連携することで解決できる問題や視野を変えることでさらに魅力を増す資源が数多くあります。今後、この地域に必要なことは、利便性によるわがまちの発展だけを考えるのではなく、九州の各地域のつながりによって新たな価値を生み出す「連鎖のまち」として九州全体の発展に寄与することです。

連鎖のひと

交通利便性が高く、自然にも恵まれたこの地域は、快適で便利なまちとして今後もしばらくは発展傾向にあります。しかし、それは他の地域に比べて時間差があるだけで、人口減少や高齢化の問題は必ず訪れることであり、日本全体としてはもとより、今後は九州という枠組みでこうした問題に取り組んでいくことが必要です。

九州から人が集まるこのクロスロード地域の住民は、わがまちの利益のみを考えるのではなく、九州全体を視野に持ち、各地域の魅力を見出し、新たな価値観を生み出すことが必要とされます。九州をわがまちと思い、九州の発展をこの地域の発展と同じように考えられる九州人として、各地域のことを自分たちの地域につなげて考えられる「連鎖のひと」でなければなりません。

02 「情熱」のかなめ



Passion



情熱のまち

都市部一極集中を背景に、これまで地方が目指してきた発展の姿は、都市部の経済や文化に追いつくことでしたが、国家における活力の源泉が地方にあることに気づき始めた時代の到来において、地方は再び活力を取り戻すべく、それぞれの地域性を鑑み、これまでの伝統文化を昇華させていく一方で、様々な角度から地域を活性する新たな価値を模索しています。しかし、新たに生み出す地域の価値には、地域住民が広く関わるなかで主体性を持って育てていくことが必要です。

この地域は、鳥栖市をホームタウンとするサガン鳥栖が、様々な変遷の中で悲願のJ1昇格を果たし、これまで関わることのなかった幅広い世代、さらには県内及びクロスロード地域にまで広がり続けており、サッカーのみならず、スポーツというカテゴリーにより地域の一体感を育むシンボルとして浸透しつつあります。さらに、この地域に新たな文化を吹き込んで来られたキッズミュージカルTOSUをはじめ、地域住民がつくりあげた文化や育まれつつある文化が数多く存在しており、さらにこの地域に活力を見出す原動力となるものと期待されています。今後、地方小都市であるこの地域が、これらの新たな価値を地域の定着した文化として昇華させ続けさせていくことは、新たに地域の価値を見出そうとしている多くの地域に大きな影響を及ぼすことになると思います。九州の各地域が地域独自の資源をまちの活力へと育むことで九州の発展に導くために、この地域が熱い感動を生む「情熱のまち」として九州の「かなめ」の役割を果たすことが必要です。

情熱のひと

これらの新たな価値を地域の定着した文化として昇華させ続けていくためには、地域資源を価値として見出す一方で、生み出した価値を文化にまでつなげていく人々の熱い情熱が必要となります。私たちは今では全国区となったサガン鳥栖を地域のシンボルにまで昇華させる過程において、様々な変遷の中で多くを学んだまちであり、熱い情熱をそそぎ続ける多くのひとが住み暮らしています。私たちは、地域の資源を価値として育むことのできた地域住民としての誇りをもち、その熱い情熱を九州全体に伝播していくことで、多くの地域に活力をもたらすことができるものと考えます。

03 「救済」のかなめ



Relief

救済のまち

2011年、東日本各地に未曾有の被害をもたらした東日本大震災は、日常から災害に備える契機となりましたが、近年の局地的集中豪雨（ゲリラ豪雨）による洪水や土砂災害など、備えるべき災害が多様化しています。今後、九州の各地域が様々な災害に備えた防災計画をする上で、救済のかなめとなる災害拠点都市の存在は、ますます欠かせないものになってきます。そのような中で、内陸のこの地域は津波による被害を受けにくく、地震に対しても西暦679年に大きな被害が記録されているぐらいのもので、近年のゲリラ豪雨による大きな被害報告もなく、自然災害を受けにくい地域だと言えます。

自然災害に強く、九州の陸路交通網の要衝のこの地域は、九州のどの地域にもアクセスがしやすく、日常から陸路輸送が行き交う物流都市として、大規模なターミナルと倉庫が数多く点在する地域です。さらに、このクロスロード地域には3つの陸上自衛隊が存在し、災害派遣のかなめとなりうる機能を備えた地域と言えます。有事の際の救済拠点となるには、災害が発生してから、官民がそれぞれに救済活動を行うのではなく、この地域が行える災害支援を行政が把握し、地域の官民が一体となった災害ネットワークを構築しなければなりません。九州の救済拠点都市となる「救済のまち」として、九州から頼りにされる地域を目指していく必要があります。

救済のひと

この地域は災害を受けにくい地域だと言えますが、災害拠点都市となる「救済のまち」に住む人は、わがまちの安全に満足するのではなく、九州のどの地域で災害が起きても、救助の手を差し伸べることができる人でなければなりません。しかし、それは有事の際に、突然に表れるものではなく、日常的に「救済のひと」としての自覚と災害に対する知識を持ち合わせ、地域と一体となって救済活動ができる九州の危機を救える人でなければなりません。

04 「国際」のかなめ



International

国際のまち

日本は、古くより他国の様々な文化を柔軟に取り入れ、自国の風土の中から育まれてきた文化との融合をはかりながら、現在まで我が国を発展的に築いてまいりました。しかしながら、日常的に異国の価値を尊重する環境にある西欧諸国を始めとする世界の国々と比べると、島国であるがゆえに他国の文化に触れる機会も少なく、地方に行くほど国際感覚は疎い傾向にあります。

今後、ますます進む世界のグローバル化の中で、地方においても地域住民が国際的な感覚を身につけることや、国際的な視点を持ったまちづくりは共通な課題で、九州がさらなる発展をとげるためには、この地域のみならず多くの地域がそれぞれの特性を考慮した国際的な感覚を持つ都市となる必要があります。それは東京や香港に準じたビル群の建ち並ぶ国際都市ではなく、かたちは様々ですが九州らしく伸びやかな「国際のまち」でなければなりません。しかし、今後のグローバル化による地方の国際都市が、どのような姿となるべきか未だ流動的で、明確には捉えられていません。

道州制を見据えた中核都市を目指すためには、国際化によって他国にも開かれた地域となり、九州を世界に発信することは必要なことですが、外国文化が溢れる混沌とした国際都市ではなく、日本であることはもちろん九州の中核を担う都市として、他国の文化や価値観を柔軟に受け入れられ、九州の文化や価値観を発信できる「国際のまち」として、どのように九州の発展を導くのかを今後も継続して考えていく必要があります。

国際のひと

道州制導入による自立した九州を目指す上で、東アジアをはじめとする世界への圏域拡大は不可欠です。九州の発展を担うこの地域の人々は、日本のことを他国に語り、他国のことも理解できる国際感覚を身につけ、他国を尊重し、他国のことを知ることで日本のことをより深く知る、東アジアに向けて九州の先頭に立ち、グローバル化の中で、九州とアジアがどのような関係であるべきかを考えられる「国際のひと」でなければなりません。



生命のまち

現在、医療技術の進歩によって、日本は世界でも有数の長寿命の健康大国となりました。さらに、昨今の健康ブームによって健康志向の人が増えており、健康への関心は高まっています。そのような中、2013年に九州で初となる国際重粒子線がん治療施設「サガハイマツト」が開業し、九州でも先端医療を受けることができるようになりました。今後は近隣の大学病院や医療機関、研究施設との更なる連携による一体となった医療ツーリズムを確立し、地域に住まう人だけでなく、訪れる人々を健やかにする九州の最先端医療都市になることが期待されています。医療の充実する都市は、医療技術のみに頼るのではなく、地域住民が健康志向で、老若男女が健やかに生活できる健康都市とならなければなりません。女性が安心して出産できるように子育て支援や再就職支援を充実し、出生率を向上させ少子高齢化を抑制します。また、健康促進活動を充実させ、病気とならないための基礎教養や運動の普及を行うとともに、ユニバーサルデザインを推進し、すべての命にやさしく、一つの命を大切に育てていく「生命のまち」として、九州を健やかにします。この地域に住む人、訪れる人だけでなく、これから誕生する人が、健全な生活を送られることが約束された将来を見据えた健康のまちづくりが必要です。

生命のひと

この地域は、2013年に「サガハイマツト」が開業し、今後の医療機関の連携や医療ツーリズムなど、医療を中心とした展開が期待されます。九州における医療都市となりうる地域の住民として、一般的な医療の基礎教養を高めるとともに、さらには他者を思いやる九州人としての心を持った医療従事者を増やし、九州の命を支える人たちで溢れる地域を目指します。また、健康促進活動によって健康志向の高い住民を増やし、九州を健やかにできる「生命のひと」を育成します。

一般社団法人 鳥栖青年会議所

制作責任者 2014 年度 理事長 齊藤 正晃
特別顧問 宮原 孝二
中核都市構想戦略会議 議長 山口 修
委員 吉原 慎一郎

発行日 2014 年 9 月 15 日

発行責任者 2014 年度 一般社団法人 鳥栖青年会議所

編集責任者 中核都市構想戦略会議

発行所 一般社団法人 鳥栖青年会議所

佐賀県鳥栖市元町 1380-5

TEL 0942-82-7275

印刷 有限会社 久光印刷

